NARUTO～転生～　２回目

ルリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ～転生～　２回目

【Ｎコード】
Ｎ１３２３Ｙ

【作者名】
ルリ

【あらすじ】
いつの間にか九尾から黒い犬に転生を果たした。
駄作。

プロローグ

チュチュチュ

と小鳥のさえずりが聞こえたので、寝ぼけ眼ながら目を開けた。

「・・・・う・・・・わ・・・・」

「・・・ア・・・起きた」

目を開けたら、見事な赤い髪の女の子が見える。

誰だっけ

「おなかすいたでしょう」

その女は、俺を抱え上げながら歩いた。

歩いた。

すごい・・・・な・・・・！

なんで持ち上げれるんだ

「・・ウ・・・ワンワン（なんで持ち上げれるんだ）」

「もうちょっと待って今、上げるから」

はて、声がおかしい。

ガツガツ　ペロペロ　ガツガツ

考え事している間に女が焼いてくれたパンやスープを食べていた。

恐るべし本能！

俺は恐る恐る今の自分を近くにあった鏡でのぞきこんだ。

みると黒く小さい犬になっていた。

なんでだ

・・・・考えるだけ無駄か。

1

あれから3年がたった。
3年もたてば自分の状況とかも分かった。
この世界はやはりＮＡＲＵＴＯの世界だった。
それと未来に関する情報は、よく分からなかった。
せいぜいあと数年で渦巻一族が滅びるぐらいしか分かったことがない
分かるのは、術位だった。
やはり現在は

ガツガツ

と食べていた。
どうやら本能の方が優先されるらしい。
それと、俺の主人は、クシナという女性だ。
俺は、６歳で、クシナも、６歳で一人暮らしみたいだ。
１年前までは母親も生きていたが死んだみたい。

「今日は、お魚を取るよ。黒」

「・・・ワンワン」

とついて行った。
ああ・・そうそう黒というのはクシナがつけた名前。

魚を釣った。
川の浅瀬に行き

パチャパチャ

「キャ・・・冷たい・もう黒・・・えい」

と最後は水の掛け合いになった。
こういう平和なのもいいなと思った。
それとクシナが寝静まってから術の練習をした。
この手だと変化の術は使えないみたい。
なので使える術は、印を使わない術しか無理だった。

2

６歳になった頃に俺たちは、忍術の練習をした。
俺は、犬塚一族に伝わる忍術を教えてもらった。
あれから3年がたった。

「なんだか嫌な予感がする」

そう自分の家に帰ってきたからクシナがつぶやいた。

「イヤの予感とは？」

そうそう・・・ここ3年で、人間の言葉が話せるようになった。

「分からない」

「そうか。なら今日は、起きているか」

「いいの」

「ああ」

深夜１２時　クシナはというと

「スースー」

と寝ていた。

「あれだけ張りきっていたのに」

３０分後

「俺も寝よ・・・（ギャー）」

ドコーン　バコーン

今のは、悲鳴か。
それに火薬のにおい

ペロペロ

「起きろ」

ペロペロ

「スースー」

なめてみても起きない。

「ダメだ。起きないな。仕方ない・・・様子を見に行くか」

黒は、飛び出しこの里ででかい所に上がり見た先には、
何人もの渦巻の忍びと霧隠れ・土隠れの忍びが交戦している場面だった。

「・・・・キャーーー。」

とクシナの悲鳴が響き渡った。

「なにか・・・あったな」
そういい早足でかけて行った。
クシナＳＩＤＥ
「ウ・・・ここは・・・黒」
見渡せどいなかった。
そこで、家の中を探せどいなかったので外を不用心にも出た。
家を出て角を曲がろうとした先に
バコ
と蹴られ壁に激突した。
「カハッ・・・何が」
みると二人の人影が見えた。
その先には、何人もの男の人達は死んでた。
不思議と女の人は裸になっている人たちが多かった。
「（なんで？裸なの）」
実はクシナ性教育を受けていないため性のことを知らない。
「まあ不細工だな」
バコ　バコ

と散々蹴られた。
蹴られた反動か全く抵抗なく殴られ放題だった。

「やめろ・・・腐ってもこいつは女だ」

「分かったよ。手早くな」

「ああ」

ビリビリ

と服を破かれた。
クシナも抵抗するが、男の力にかなわなずに逆にその抵抗を男は、楽しんでいた。

「・・・ア・・・い・・いや・・・」

本能が警鐘を慣らすが

ガクガク

と震えだした。

ビリビリ

と最後の服を破かれ、クシナにまたがり自分のストラーダをセットアップした。
クシナは激しく抵抗した。

ベチ

と顔を殴り、抵抗をやめさせた。

「暴れるな。殺すぞ」

と殺気を出し、クシナは

ガクガク

とまた怯え出した。

クシナの花に狙いを定め合体しようとした時に

「イヤーーー」

とやっぱり激しく抵抗と悲鳴を上げた。

「うるせいぞ」

と手を挙げクシナを殴ろうとしたら

ドコーン

と黒い塊がその男めがけ殺到し吹き飛ばした。

3

クシナＳＩＤＥ
いつの間にか私は黒の腕の中にいた。

ギュ

パフ

と上着をかぶせてくれた。

「少し待っていて、今片づける」

ナデナデ

と頭を撫でた。

「・・・ウ・・・ウン」

黒の姿にホッとしてそのまま目を閉じてしまった。

黒ＳＩＤＥ
クシナは安心したのか眠ってしまった。
クシナを優しくおろし

口寄せ　砂のヒョウタンを呼びだした。

砂をクシナの周りに展開させた。

「この数に勝てるのか」

今見えるだけでも、総勢５００名が見える

正直クシナが寝てくれてよかった・・・本気を出せる。

獣人変化　雷遁　雷の鎧

ドコーン

「ギャーーーー」「速すぎる」「助けて」

火遁　業火球の術

水遁　水龍弾

雷遁　麒麟

この日　黒によってうずまき一族襲撃に参加していた面々は、全滅した。

そして、同時に渦の国は滅亡した。

4

黒は、巻物を取り出しクシナの家を封印し、渦潮隠れの里を封印した。
クシナを連れて飛んだ。
どうやらこの世界にも生前にマーキングが残っていたみたいだ。
飛んだ場所はとある孤島だ。
その孤島にクシナの家の封印を解いた。
クシナは昼まで目を覚まさなかった。

「スースー・・う・・」

パチ

と目を覚まし隣にいた黒を抱きしめていた。

「・・・う・・・・」

「黒も目が覚めたの」

「・・・ああ」

思いっきり不機嫌そう声で返事をした。
その様子をいぶかしんでいたクシナは

ツー　ツー

と黒の体を触った。

「・・・・ウ・・・イッテーー・・・やめてくれ・・・クシナ」

「で、どうしたの」

「筋肉痛だ」

「・・・・ハ・・・ひょっとして昨日暴れたのが原因」

「ああ。待っていて今、薬塗るから」

音声のみです。

「・・・ウ・・・ちょ・・クシナ・・・やめ・・・ギャーー」

ヌリヌリ

「つめ・・・ちょそこちが・・・ア・・・やめ・・・ギャーー」

ヌリヌリ

ギュー　チュ

「ありがとう」

クシナが何をしたのかご想像にお任せします。

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ」

だが、今だクシナは自分がどこにいるのか分かっていなかった。

1時間後。

外に出たクシナは

「エーーーー。ここどこ」

テクテク

「黒」

ガクガクガク

と黒を揺らした。

「くし・・・・お・・・・ち・・・・」

ガクガクガク

「揺らすのやめてくれ」

「へ・・・ア・・・ごめん」

ぐったりと黒はしていた。

「ここは、どこ・・・それに何があったのか教えて」

「分かった」

土影は昨日起こったことを思い返していた。

回想中

ドコーン

バコーン

各地で爆発が起きた。
その様子を遠くから見守っていた土影達は

「まさか渦潮隠れの里にあんなのがいたとは」

「どうします。撤退しますか」

「ああ。それがいいじゃろう」

と引き上げていった。

生き残った人たちは2日かけて、木の葉に到着。
3代目火影にこのことを伝えた。

回想中

生き残った人は、黒が暴れているすきに

「今のうちに脱出の準備をするんだ」

「はい」

総勢３００名ほどの人たちが里を抜けだす準備をした。
大暴れてしている黒に向かって

「黒」

「なんだ」

「後、２０分ほどひきつくてくれ。我々はこの里を捨てる」

「・・・分かった」

黒を囮にして、木の葉に向かうため脱出した。
脱出する里の人間に気がついた忍びから順番に消していった。

クシナに説明中

「なるほど・・・彼らを倒した後。時空間忍術で飛んだのね」

「ああ・・・だからここがどこか分からん」

「そっか・・・なら仕方ない。じゃあ黒が万全に治った後この島を探検だ」

「おーー」

黒もノリよく言った。
ちなみにクシナにウソは言っていない。
生前ここにマーキングを施したのはヒナタである。
黒は思いもしなかったが、この１ヶ月後２つ名がついた。
その名も

「黒の閃光」

5

うずまき一族から報告を受けた後。
さっそく火影は、上忍・中忍で構成される小隊を動かした。

「ここか？」

小隊がついた先には、半透明な球状な結界により封印されていた渦潮隠れの里だった。
小隊は、その結界を破こうとしたが破けなかった。

「これは、駄目だな」

「ひとまず火影様に報告をしよう」

そういい木の葉の人間は引き揚げた。

火影ＳＩＤＥ

「そろそろ決めねばならぬな」

「確かに」

そこには重苦しい顔をしていた木の葉のご意見番と火影と渦巻一族の代表２名がいた。

「で、クシナ以外に適任がおるのか」

「ミト殿のお孫さまのサキならばあるいわ」

「分かった。では、サキを九尾の人柱力にする」

「ハッ」

こうしてサキが九尾の人柱力にされた。
後の４代目火影の妻が生まれた瞬間でもある。

孤島では、黒とクシナは休養していた。
黒は、筋肉痛が治らずに、クシナは、男達から受けた暴行の為である。
クシナの怪我は、１０日で全回復したが、黒は、それから2カ月もかかった。

2カ月後
黒とクシナは、修業を開始していた。
修業では、木登りを開始していた。

クシナは、木にのぼった。

ツル

「へ・・・」

トン

と木に落ちた。

「イッター。足すりむいた。」

ペロペロ

と黒はクシナが怪我をした所をなめだした。

「ひゃ・・・ア・・・・ウ・・・・アん・・・やめ・・・アはっは」

となった。

「ハァハァ・・・・疲れた。」

「そうか？」

「黒なめすぎ・・・だからやめて行ったのに」

「悪い」

ある時は水面歩行中

「キャ」

と川に落ちたりしていて、服がびしょぬれになり・・・見えていた。

「・・・冷たい」

パシャパシャ

と水をかけて遊びになったりしていた。

日々遊んでいたので、修業も遅々と進まなかった。

ぶっちゃけ黒は、修行の邪魔をしていた。

木の葉に行くのが遅くなれば、九尾を宿主にすることをやめ木の葉

から選出されるはず。
と思っていたりしていた。
黒は、知らなかった。
すでに九尾の人柱力に渦巻一族の一人がなっていることをその名も

「サキ」

後に木の葉を・・・・・するものである。

6

ある日、目が覚めたら寒かった。

「・・・ウう・・・寒い」

ブルブル

と震えていた。
そこに黒が現れた。

「なんだ雪か」

「雪？ってなに」

「雪というのは、寒い地方に振るものだと思ってもらえればいい。
その土地では、雪遊びをしたりしたはずだ。」

「へえ・・・じゃあ今日は私遊んでくるから」

とクシナが雪の中楽しそうに遊びに行った。
午後からものすごくふぶいていた。
クシナは、まだ帰っていなかった。

「遅い・・・探しに行くか」

とクシナを探しに出かけ早1時間

ガクガク

と外で震えていた。

ペロペロ

となめた。

「ひゃ・・・ア・・・ちょ・・・ア・・・ン・・・ア・・・ンン」

ペロペロ

となめまわした。

「ハァハ・・ハァ」

「大丈夫か」

クシナの額に頭で体温を測ると・・・熱かった。
すぐさまクシナを温泉のある洞くつに連れて行った。
洞窟内から湯気が出ていた。

獣人分身

クシナの服を一枚一枚脱がしていった。

ドキドキ

心臓は早鐘を打っていた。
クシナの裸を見て・・・綺麗だと思った。
クシナを抱きしめながら温泉に入った。

・・・・・・この状態うれしいけど・・・つらいな
気づいたら1時間近く温泉に浸かったみたいだった。
吹雪も止んだので、クシナに服を着せ急いで家に帰った。
クシナの服を脱がせベットで寝かした。

翌日。
案の定クシナは風邪でダウンしていた。
おかゆを食べさせようとしたら

「食べたくない」

「食べてくれ・・・はい・・・アーン」

「あ・・・そうだ黒。前みたいに口移しで食べさせて」

「な・・・・」

「早く・・・早く」

と急かした。
どうしよう。
クシナがものすごく子供っぽい。
１０分後

「ン・・・ア・・・・・ン・・・」

ゴク

クシナの嘆願に負け口移しで食べさせた。

「ン・・・ン・・・ン・・・ン」

ゴクゴク

クシナと黒の唾液がくっつき、舌を絡ませながら食べさせた。
みようによっては、思いっきり・・・・考えないようにしよう。

「ン・・・もっと・・・・・ン・・・ン・・・黒・・・もっとほしい」

「分かっ・・・・ン・・・・ん・・・」

と時折クシナが舌を絡ませてくる。
どうやら俺たちは2日もやっていたらしい。
クシナは、すでに深い眠りに入っている。
熱はひいたらしい。
俺も寝よう。
翌朝。

クシナＳＩＤＥ

「ン・・・」

パチ

と目を覚まし黒を見つけた。

ボン

ぼんやりと自分がやったことを思い出してしまった。

どうしよう。
まともに顔を見れない。
「おー・・・・オイ・・・・大丈夫か」
と黒が声をかけてくれた。
黒の顔を見て
カー
と顔が赤くなるのが分かる。
ＳＩＤＥＥＮＤ
クシナが目をボーとしていたので声をかけた。
クシナがこっちを見たのが分かり昨日のことを思い出してしまい
カー
と赤面してしまった。
お互いチラチラとみては顔を赤くしていた。
顔を見つめあい赤面してなれるまで１カ月かかった。
その間。お互い修業どころじゃなかった。

7

あれから3年の月日がたった。
俺たちはももう12歳になった。
今では、俺も変化の術で人間の姿になっている。
元の姿でもいいが、思いっきりクシナの背丈を越えていたため断念した。
早いもので、すでにチャクラコントロールも上忍並にできるようになっていた。
クシナの性質は風だった。
風の術を中忍クラスのを知っている限りで教えた。
とはいえ、今だクシナは下忍クラスの術しか使えないんだが、それでも早いと思った。
クシナが一番使えるのは、鎖が出て相手を捕縛する術がすごいのである。
人間形態なら問題なかったが、元の姿に戻って戦ったら負けた。
俺の方はというと、今、九尾とやりあったら負けるのが分かった。
身体能力が違い過ぎる。
チャクラに関しては、九尾を多少越えていた。
コントロールに関しても以前よりもうまくなった。
・・・・・・でも戦ったら負ける。

本日はクシナがなぜか張り切っていた。

「どうしてそんなに張り切っているんだ？」

「・・・エ・・ああ・・・とあることをしようと思って」

「とあること？」

「うん。黙ってついてきて」

「ああ」

開けた場所に到着
おもむろクシナが

口寄せの術

「ハ・・・ちょ待て・・・クシナ」

「エ・・・・キャーーー」

黒い穴にクシナが引っ張られていた。

ガシっ

と掴みそのまま黒い穴に?みこまれてしまった。
そして・・・・・・・・・消えた。

「ン・・・」

パチ

と目を覚ましたらクシナを抱きしめていたようだ。
辺りを見渡しら森の中にいるのが分かる。
遠くから何かの集落が見える。

似非白眼

を使い遠く見たら火影岩が見えた。

「あれは、木の葉か。」

クシナを起こすが全く起きないので仕方ないので、クシナを背負い木の葉を目指した。

すんなりと入ることが出来た。

宿屋を取った。

影分身の術

を使い、情報収集にいかした。

本体は、そのまま布団を敷きクシナを寝かした。

8

分身情報収集中

分かったこと

・3代目火影も生きているらしい

「・・・？ということは」

「・・・久しいな」

黒が考え込んでいる時に大きな影が見えた。

「誰だ？」

「においをかいでわからんか」

クンクン

「お前・・・」

そこで、懐かしい友にあった。

「黒丸」

「ようやく分かったか。で・・・どういうことだ。なぜ若いんだ？」

「実は」

黒丸に説明中
はたから見たらシュールな光景だ。
「なるほど・・・なら渦の国が滅亡したのは分かるな」
「ああ」
「なら・・その後の説明をしてやる」
「ああ。頼む」
黒丸説明中
「そうか。サンキュ」
「所で、火影様に説明しなければいけない」
「そうか。分かった」
黒丸の案内で火影の元に案内された。
3代目に説明した。
途中で
「クシナを木の葉の忍びにはしません」
「分かった。」
「後、木の葉で有事の際に活動する許可をくれ」
「ああ」

と火影が納得してくれた。
しかしなんで火影が青い顔でうなずいたのか不明だ？
分身を解き、本体にこのことが伝わった。
２時間後。
目が覚めたクシナに説明をした。
納得してくれた。ただし条件付きだったが
「さあ・・・やるわよ」
と嬉々としてナイフを俺の方に向けたまま張り切っていた。
「ああ」
断ったらＯＨＡＮＡＳＩになるな
「これでいいの」
「ああ」
ギュ
と抱きしめながら
「これで私があなたのことをいつでも呼び出せるんだね」
「・・・まあ・・そうだが」
嬉しそうで何よりだ。

そうクシナと口寄せ契約をした。

9

翌日

「ほら早くいこう」

「ああ」

ととある場所に向かった。
そこは会場だった。
会場にはすでにたくさんの人が集まっていた。
適当な席に腰かけた。
隣は、ピンクの髪の女が座っていた。
丁度、中忍試験本戦第1回戦が始まる時だった。

「始め」

の合図でネジＶＳナルトの試験の戦いが始まった。
試験は終始ナルトが圧倒していた。

影分身　手裏剣影分身

を四方八方から放ちネジは

回天

をせざる得なかった。
回天で動きが止まったすきに

桜花衝

を発動しネジをぶっ飛ばしていた。
会場の一同は唖然としていた。

「すごい」

「ああ。見事な試合だ」

どうやらこちらのナルトもミナト並の才能があるらしい。
しかし母親は、誰だ？
その後も原作道理に進んでいた。
サスケの試合の時に羽が辺りに舞っていた。
カブトの幻術が発動した。

解

幻術を解いた。
周りを見渡すとほかの上忍・中忍・一部下忍の何人かはどうやら幻術を解いたみたいだ。

「これはいったい？」

「さあな」

客に化けていた音忍達が姿を現した。
そこからは、木の葉ＶＳ音&砂隠れの戦いになった。

10

火影ＶＳオロチマルの戦いが始まった。
やはり初代・２代目火影を穢土転生されて圧倒的に不利みたいだ。
木の葉の外では大蛇が口寄せされたいた。
大蛇に壊された所から砂忍が侵入していた。

会場では、

「グワーーーー」

とナルトが雄叫びをあげていた。

「いったい今度は何？」

みると赤いチャクラをまとっていた。

「人柱力の力か」

「じんちゅうりき？」

「知らんのも無理はないか。それについては、担当上忍から聞くといい」

ザッ

「死ね」

と音忍がこちらに向かってきた。

口寄せ　瓢箪

で、砂を展開させ敵を捕まえては投げていた。

ドサ　バコ　ドサ

「ギャーー」「グハっ」

「ありがとうございます」

デローン

と砂の守鶴が現れた。

「今度は何？」

「砂の守鶴か」

「守鶴というのは？」

「一尾のことだ」

「・・・！尾獣か。厄介だな。しかしどうして？」

「ナルトの異変に呼応したんだろ」

「まずい」

「で、どうする。カカシ」

「そうだ〜グルグル〜」

シュ

とナルトがこちらに勢いめがけて突っ込んできた。
砂で応戦した。

バコ　バコ　バコ　ドコーン

と連続で拳をたたきつける者の砂の防壁を破れなかった。

似非白眼

「サクラだったけ？」

「ええ」

「クシナ起こしてくれない」

「エ・・・いいですけど。」

「クシナを起こした後砂の守鶴を止めるように言っておいて。
俺はナルトを抑える」

「止める方法があるのか」

「ある。見た限りナルトの封印術がとかれた理由は、５行封印のせいだ」

「な・・・誰が別の封印を？」

「そんなことより止めるのが先だ」

「サクラ・・・そういうことだからクシナという子、起こしておいてね」

「はい」

黒ＳＩＤＥ

ナルトＶＳ黒

ドコ　バコ　ドコ

と黒に立ち向かうナルトがいた。
それも九尾の力のせいでものすごく速い。

「厄介だな。仕方ない」

雷遁　雷の鎧

で、ナルトの動きに追い付き、

ガシ

と捕まえ、

五行解印

を発動した。
徐々に九尾化がとけ、倒れこんだ。
ナルトにも砂の守りをつけた。

「離しやがれ。」

と一尾がわめいていた。
どうやらクシナの鎖に動きを封じられたらしくふだんの動きが出せないみたいだ。

クシナＳＩＤＥ

解

「・・・・ん・・・・ここは？」

「起きましたか」

と目の前にサクラの顔が映った。

「誰？」

「実は、あそこでナルトと戦っている人があなたを起こして
一尾を止めれと言われたんです」

「もしかして、あれ」

クシナが指さした方向には、ものすごくハイテンションな狸がいた。

「次のやつ。君に決めた」

風遁　飛燕

と己のしっぽにチャクラを流し込み忍びをぶったたいていた。

「ギャー」「ヘブシ」

「死ね貴様ら」

「「え」」

話し込んでいたら、クシナ達に立ち向かう勇者(バカ)がいた。

バコーン

と砂につかまり投げ飛ばされた。

「「・・・・・」」

「ともかく行きましょう」

「ええ」

クシナ・サクラ屋根に移動

「ここでいいの」

「ええ」

と言いクシナは鎖を展開させ一尾をあっという間に拘束した。

「離しやがれ」

「すごい」

トン

「捕まえたのか」

「黒」

「後は、俺があれをたたく」

秘術・霧雨

で中忍試験会場に大雨が降ってきた。

「な・・・これは・・・力が」

「いったい何」

「この術は、対象の術を弱らせる」

「チクショウ。やっと出てこられたのに」

一尾は雨の影響を受けて、どんどん砂がはがされていった。

一尾だけではなく、初代・2代目・オロチマル・音忍・砂忍の動きが鈍ってきた。

最後には、クシナの鎖に押しつぶされ消えた。

残ったのは、ガアラだけだったがクシナに拘束されて動けなかった。

木の葉に侵攻していた蛇は、ジライヤの口寄せの大蝦蟇によって倒された。

「サクラ　ここでクシナの方を頼む」

「分かった。」

「黒。どうするの？」

「結界を突破して、オロチマルと戦う」

「気をつけてね」

「ああ」

ザッ

パリーン

と結界を破壊した。

ザッ

「グワ」

バコ　ドコ

とオロチマルは吹き飛ばされながらも

潜影多蛇手

ヒラリ

だが、かわされた。

バコ　ドコ

残った初代・2代目は、3代目によって封印された。

バコ　ドコ

「ガハっ」

オロチマルはボロボロだった。

「クッ・・・作戦はここまでよ。帰るわ」

「ハッ」

結界を解いた。

そのままオロチマルと4人衆は帰っていった。

暗部が追うが、4人衆の糸につかまり吹き飛ばされた。

なし崩しにほかの音・砂忍も引き上げていった。

めんどくさそうになる前に

ガシ

「へ」

「逃げるぞ。クシナ」

カー

「・・・うん」

顔を赤くしながら頷いていた。
クシナをお姫様だっこしたまま逃亡した。
国境を大分越えた所で、雲隠れの忍びが一人の少女を岩にぶつけていた。

「ガハ」

「黒。あの子助けてあげて」

「分かった」

と拳1発で

ドコーン

と吹き飛ばし、少女を助けた。
彼女を医療忍術で治癒した後。

「あ。そうだ。このまま飛べばいいんだ」

「それ、初めに気付こうよ」

「あははは」

と笑ってごまかした。

飛雷神の術

で、少女ごと飛んだ。

結果

・3代目火影は生き残った。

・黒は、謎の少女を連れ帰った（誘拐ともいう）

・試験会場周辺で死ぬ人が多数いた。

11

家に到着。

「「・・・・・・」」

部屋の中に入ったら二人とも唖然とした。

「おかしい？部屋がきれいすぎる」

「未来に飛ばされたと聞いたけど、どのくらい経ったの？」

「ざっと」

ヒューン

「「へ・・・・」」

と黒い穴が広がった。

3人一緒に？みこまれてしまった。

ガチュ

と3つの影が現れた。

「これでよかったの」

「他に方法はなかった。すまないな。君を結局巻き込んだ」

「・・・気にしないでください。私が何者か分かったので別にいいです」

赤い髪の美女・黒髪の美女・黒い髪のイケメンがそういう話をしていた。

とはいえ、黒達は、この時点では何も知らない。

バコ　ドサ　ドサ

「・・・イッテエ」

「・・・ここは？」

「どうやら俺達の家のようだ。戻ってくれたらしい」

「ほ・・・じゃなくてこの子どうしよう？」

「戻す方法はない」

「そうだよね」

「とりあえず看病しよう」

「ええ」

そういい二人は謎の少女をベットに寝かして看病した。

「この後どうするの？」

「この子を元いた時代に帰そう」

「じゃあ」

「やめろ」

「えー」

「口寄せは何が起こるか分からん。それに俺と契約した以上俺が口寄せされるだけだ」

「・・・あ」

「他の方法で元の世界に帰す」

「・・・・分かった。」

「いちから修業をしなおそう」

「うん」

12

「・・・ん・・・ここは」

ようやく謎の少女が起きた。

「起きた」

とクシナが声をかけた。

「・・・・はい。あのここは？」

「ここは、私達の家だよ。で、あなたどこの里の人」

「どこって・・・・・」

ズキン

「・・・くっ・・・・・」

「大丈夫。」

「ええ・・・その何も分からないんです。」

「エ・・・記憶喪失」

「そのようだな。フム。・・・・！その目」

黒が謎の少女の目を見て驚いた。

「目ですか」

「あら、白い目ね」

「木の葉の日向一族の人間か。どうやら君の名前は日向ヒナタのようだな」

「よく分かるわね」

「ああ。中忍試験本戦前に黒丸から一応聞いていたからな。
その年で年齢が会う日向の人間というとヒナタしか該当者がいない」

「なるほど」

「あの・・・その・・・木の葉に帰れるんですか」

「じつは・・・・」

黒説明中

「そうですか。ここは過去の世界なんですか」

「ああ。すまないな。俺達も君を元いた時代に帰せるように努力しよう
それでだ。どうだろ一緒に暮さないか」

「・・・・ですが迷惑じゃありませんか。」

「気にしないの」

「・・・わかりました。よろしくお願いします」

こうして、ヒナタ・クシナ・黒の3人での生活がスタートした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1323y/

NARUTO～転生～　２回目

2011年11月4日17時19分発行